

東海村 少年少女合唱団

「今年一人、メンバーのお子さん、つまり二世が加わったんですよ」と感慨深げに語るのは、結成以来、合唱団を率いて25年目を迎える坂場治さん。毎年行われる定期演奏会へ向けて、小学1年生から高校2年生までの50人を超える団員は練習に余念がありません。なかなか本気モードに入らないと「そんなことでは、東海村から一歩も出られないぞ！」の聲が響きます。そう、先生の口癖は「世界の東海村少年少女合唱団」。大きく世界へ羽ばたいてほしいとの温かなメッセージなのです。

合唱団の活動は、ユニークな3部構成からなる毎年の定期演奏会のほか、村内外の合唱祭や音楽会への出演など。平成18年には『ミュージカルオブモーツァルト アマデウスがやって来た』公演でプロの音楽家との共演を果たし、「みんな何かを感じ取った様子、その後の目の色が違っていましたよ」と、一段と大きな経験を積んだようです。



坂場治先生

坂場さんをはじめ、指導をされる方々の思いは一つ。「音楽ですもの、何より楽しんで歌うこと。その楽しさが聴いてくれる人たちが伝わってほしい、それが一番だと思えます」。歌う仲間がいて、耳を傾けてくれる仲間がいて、応援やサポートをしてくれる仲間が集まってくる。そのようなふれあいが、

メロディーに乗って静かに広がっているようです。この場所で君に会えた 不思議だね笑顔になれた この思いをメロディーで届けよう…。この歌詞は、東海村少年少女合唱団オリジナルソングの歌い出しの詞です。皆さんの素直な気持ちがかぼれてくる、すてきな言葉だと思いませんか。



定期演奏会に向けて練習にも熱が入ります。



茨城県少年少女合唱祭(平成18年)でのステージの様子。

東海村の体験派(聞けば聞くほど) 話そう!

書家 山口歡一・紅雪さん



書との出会いは、「高校時代に茂庭錫亭先生の書に惹かれたのがきっかけ」と言う歡一さん。結婚してから書始めたと言う紅雪さん。お二人の創作活動の

テーマは「日本語として読める書」。誰もが楽しめる書。「難解な漢詩に比べて、日本語は言葉としてそのまま読めるので、本音で話ができます。書を通じて人とふれあうことができるのが魅力ですね。今までにいろんな人の話や人生に触れてきました。人として生きてきて、人としての生活を書いていきたい。」

このテーマの下、平成元年以来、夫婦二人展「歡紅か〜く〜展」を続けてきました。気軽に楽しめる書に共感する人たちも増え、今後も、このテーマで続けていきたいとのこと。

東海村には昭和48年からお住まいの山口さん。この村に書の文化を広めていきたいとの思いから、東海書道会(現・書道連盟)を立ち上げたそうです。現在は、アートロード展をはじめとする会の活動に加え、自宅やコミュ

テクノ交流館リコッティで開催された第16回歡紅ふ〜ぶ〜展の様子。





小学生から社会人まで、幅広い年齢層のプレーヤーが奏でる私たちの村の音色…。結成から間もなく4年目を迎える東海村吹奏楽団は、これまでミニコンサートや村のイベントなどでその美しい調べを響かせ、感動を伝えてきています。常任指揮者の原進さんの指揮の下、村の吹奏楽団は、優しく美しいその旋律を一段と深めているようです。

「何より自分たちが楽しく演奏したい。演奏者も聴き手も一緒になって喜びを感じ合えるバンドでありたいですね」と、団長の宮城孝雄さん。10代から60代までのメンバーで作り上げるステージからは、まさに大きな家族のような温かさが伝わってきます。メンバーの年齢やキャリアはさまざまですが、お互いに助け合ったり、年の離れた仲間の頑張りを受けて自らの励みにしたりと、音楽の楽しさとともに、人と人との

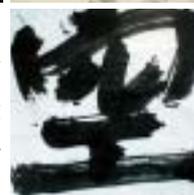
東海村 吹奏楽団



宮城孝雄団長(右)と
齋藤恭央副団長



東海村を 表現する



つながりを感じられることが、わが村の楽団ならではの特長であり素晴らしいさなのだから。

「吹奏楽というと、少し敷居が高いと感じる方もいますが、もっと気軽に聴きに来てください。皆さんの知っているあの顔の顔が楽しく演奏しているんですから。一緒に楽しみましょう」。楽団ではまた、共に演奏する仲間も歓迎しているそうです。

一つでは小さな音も、重なり溶け合って、幾重にも遠くまで広がる和音になる。これからも、心に響くすてきな感動を伝えてくれることでしょう。



地域でのコンサートを終えてみんなほっとした笑顔。



ニティセンターの行事で、村民の皆さんに書を教える活動も行っています。

「誰もが気軽にアートロード展に参加し、村の文化を向上させ、また関心を持ってもらいたい。ここで生きていきたいと思えるような村になるといいですね」と願う歓一さん。「16回も歓紅か〜く〜展を続けてこられたことを、応援していただいた村民の皆さんに感謝しています」と紅雪さんからの言葉です。

Report: Expressing Tokai

On the stage of Tokai Village, there are many people who gather together with friends and enjoy activities that are full of creativity in various fields, such as music and performing arts. There is the Tokai Village Children's Choir, which lets us hear wonderful choruses; the Tokai Village Wind-Instrument Orchestra, in which souls that love music play in harmony; and Mr. and Ms. Yamaguchi, who continue their activities to improve local culture through calligraphy. We visited these people and heard the wonderful messages that they convey through their activities and works.



ジュニア委員会とともに自然観察会を行いました。

文化財 ボランティアの会

文化財というと、「古い建物や石像などを思い浮かべるかもしれませんが、それだけではありません。埋蔵物、動物や植物などの生き物、そして歴史そのもの…。村の財産を広くとらえて守っていきたいんです」。会長の須田秋夫さんは、力強く語ります。

会の発足は4年前。村内の文化財や巨樹などのある場所を明らかにし、次世代に残していこうと有志が集まって、地図作りからスタートしました。現在の会員は約50人。動植物の実態調査や自然観察会、希少動植物の保護活動も実施しています。これらは年2回発行の広報誌や文化祭でその成果を公表しています。

特に力を入れているのが、絶滅危急種に指定されている「トウキョウウサンショウウオ」の保護活動。田植え前の水路清掃で、水底に産み付けられた卵が失われないよう、



須田秋夫さん

一時的に場所を移し保護しているそうで、「気分はもう『里親』ですよ(笑)」とのこと。こつこつした環境活動に子どもたちの関心が高まるのを受け、平成18年度にはジュニア委員会も結成されました。「自然や命の大切さ、故郷の素晴らしさを多くの子どもたちに知ってほしい」。その思い、未来へ伝わりまわらう。



東海村文化祭での展示の様子。



話そう! 東海村 東海村を伝える

東海村の体験派聞けば聞くほど!

武石広美さん



東海太鼓保存会

東海村の三大祭りやイベントなどで活躍する東海太鼓。小学生から60歳代までの幅広い演者が打ち鳴らす鼓動は、わが村を活気づけ、風土を語るリズムとして、おなじみの『首風景』になっています。

現在、東海太鼓オリジナルの楽曲は「黒松四季太鼓」「晴嵐太鼓」など4曲。そのほか

Report: Relaying Tokai

Tokai Village has traditions, customs, and irreplaceable nature that have continued since ancient times. There are people who are continuing activities to pass this culture on to the next generation. The Cultural Property Volunteer Society protects and relays information about cultural assets and the natural environment. The Folktale Renewal Society hands down legends and folktales that are being forgotten. The Tokai Taiko Preservation Society expresses local sentiment and images in the rhythmic beat of drums. We visited these people and heard about the culture and traditions unique to Tokai Village that they want to keep alive.



民話再生の会

新作の物語を前に、時に話は盛り上がり、時にみんな考え込み…。民話紙芝居の製作作業がいよいよ大詰めを迎えています。いつとき忘れ去られようとしていた東海村の伝説や昔話を発掘し、次の世代へ伝えようと集まったメンバーは15人。「すぎな班」と「おかめ班」の2班構成で、村の民話の発掘と伝承活動、民話人口の拡大を目的とした活動を行っています。

紙芝居作りはその活動の一つとして始められ、これまで年に2作ずつを発表してきました。「今でこそ原子力の村として知られていますが、かつて石神地区周辺などは一帯の文化の中心であった時



小学生への郷土紙芝居作りの指導も行っています。

新作の紙芝居を前に、構成やせりふを思案中。「目標は大きく100作品。ゆくゆくは何世代かにわたって達成できたらいいですね」。

代もあり、多くの民話が生まれ息づいていたんですよ。口伝えの風習が廃れ、失われつつあった民話の「再生」

とは、新しい住民や東海村をふるさととして生まれしてきた子どもたちへの贈り物であり、お年寄りには懐かしい記憶との再会でもある、この思いを込めているそうです。

一編の物語にも、時代背景や語り継がれてきた意味などさまざまな要素が織り重なっています。「史実を踏まえながらも、分かりやすく創作や演出を施すなど、いろいろ考えを巡らす楽しい作業ですよ」と、その面白さの秘密を話してくれます。「興味のある方はぜひ仲間に加わってください。異説珍説も大歓迎ですよ」とのこと。民話の再生と伝承の作業とは、また、興味が尽きない創造の場でもあります。



メンバーは25人。家事や仕事、学校など忙しい中でも、仲間との時間を楽しみに練習に集まります。



東海～MOのまつりでの演技の様子。

舞台や行事の内容に合わせて日々練習を重ねています。

バチを握って10年、リーダー格として一団をまとめる武石広美さんは、「太鼓には、決められた完成形というものがありません。その場やその時々に応じて、自分たちにとつての最高の演奏をする。やればやるほど難しい、変幻自在で奥深いものです」と、その魅力を語ります。一見、厳しい世界のように見えますが、練習の雰囲気はとても和やかで、メンバー同士の息もぴったり。「みんなと一つになって楽しむことが何より。聴いてくれる人たちにも、その雰囲気が伝わればいいですね」。

結成15周年となる平成19年には、何か節目となるものと考えたいと会長の山崎国光さん。また、今後はもっと仲間を増やしたいと願っているそうです。「興味のある方は、とにかく一度バチを振るってみてください。病みつきになりますよ」。その鼓動に心が揺さぶられたら、扉をたたいてみてはいかがでしょうか。



川崎智さん

中丸ホッケー スポーツ少年団

東海村が国体のホッケー会場となったのは昭和49年。実業団チームの本拠地でもあり、ホッケー熱が高かった村に誕生したホッケースポーツ少年団。かつて村内に4つのチームがありましたが、現在は中丸のスポーツ少年団の一つにまとまり、小学生男女16人のメンバーが汗を流しています。

「まず競技を心から楽しむことが第一。その中でチームワークや規律を身に付けることを目的にしています。実力は、一時期ほどの強さには及びませんが、最近では、少しずつメンバーも増えてきました」と語るコーチの川崎智さんは、東海中時代に全国2位の戦歴を誇る名コーチです。



栃木県で行われた3県交流大会にて。熱戦を終えてのひととき。

残念ながら全国

的にはさほど関心の高くないホッケーですが、見どころは「スティックさばきとほかの競技にはないスピード」。また見たことのない人は、ぜひ足を運んでほしいと、チームのみんなからも声が上がります。

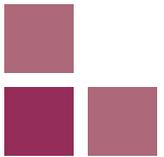
団長やコーチの望みは、子どもたちが競技を長く続けてくれること。村内2つの中学校や東海高等学校のホッケー部で活躍することが何よりうれしいと語ってくれました。課題はその先、学校を卒業してからの受け皿が十分でないこと。

「OBやOGたちが、生涯の趣味として楽しめるチームができたらと考えているところです」。ホッケーの村・東海の燃える心が、グラウンドを熱く焦がしそうです。



毎年5月に開催される関東大会へ向け、練習中。みんな本当にホッケーが楽しそう。

東海村で楽しむ、 競う



高橋守さん

健農サークル



その名の通り、「農作業を通じて楽しく、心身の健康を分かち合いましょ」とを目的にスタートして4年。そばの栽培から自作するそば

づくりを中心に、大根、ニンジン、山芋、白菜などの野菜作りなどに毎週1回、10人の仲間たちがにぎやかに集まります。うち8人はそれまで農業経験のない文字通り「畑がいない」からの参加組でした。

「自分で作った物の味は格別。なるべく農薬を使わず手作業でこしらえるからかな、市販の物より断然おいしいよ。分け前を持って帰ると家のみんなも喜ぶので一石二鳥」と、会長の高橋守さん。そして何より、寄り集まっては作物のこと、世間のことなど、いろいろと情報交換する時間が一番楽しいのだと、皆さん口をそろえます。

「空き農地を活用してそば作りを」との農業委員会の呼び掛けに端を発し生まれた健農サークルでは、3反歩のそば畑から取れるそば粉を使って、年に5、6回のそば打ちを楽しんでいます。

「目標といっても、これからは無理をせず、あくまでも自分たちでできる範囲、楽しめる範囲で続けていくだけです」と、スタイルはあくまで楽し



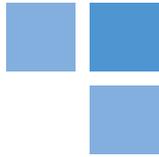


シルバーに乗って障害飛越の練習中。少年団には10人の子どもたちが参加しています。

毎週土・日曜日の朝、子どもたちが馬の寝床に使うわらを天日干したり、飼馬おけを用意したりする風景が見られます。東海馬事苑のオーナーの尾崎嗣朗さんが始めた「乗馬少年団」が、4年ほど前から活動を続けています。

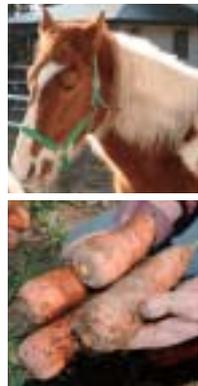
「乗馬の楽しさはもちろんですが、集団行動や馬の世話を通して、あいさつや規律の大切さ、命や物を大切に思う心を伝えたい」と思い始めました。現在はラッキー、シルバー、オジヨーの3頭とポニーのヘンリーが子どもたちのパートナーです。

「生き物が相手ですから、感情や表情を読み取ったり、機嫌を見てなだめたりするなど、人間を相手にするのは変わりませんよ」。餌の世話やブラッシング、練習をしながら馬たちに話し掛ける子どもたちに、しっぽを振って応えたり、時にはひづめを踏み鳴らしてただをこ



東海村
話そう！

東海村の体験派(聞けば聞くほど)



乗馬少年団の練習は、朝9時の朝礼から始まります。

オジヨーと尾崎さん



乗馬少年団

「馬にまたがると、考えている以上に視線が高くて、気分爽快さわやかですよ」とのこと。興味のある人、乗馬を始めてみたい人は、一度見学に来てみませんか。

ねたりと、人と動物の間に何かしら通じ合う様子がうかがい知れます。最近では動物とふれあうことで心のケアを行う「アニマルセラピー」の効果も知られるようになってきているそうです。

むことが第一。
もう少し人手があれば、それだけ楽しみも増えることでしょう。興味のある人は、ぜひ仲間に加わってみてはいかがでしょうか。



秋田、千葉、長野など、出身地もさまざま。休憩時間にはテーブルを囲んでお茶を飲みながらの話に花が咲きます。